

動物愛護思想普及のための新たな試み
～ハローアニマル「いのちの授業」～

長野県動物愛護センター ○高橋 葵 松澤淑美 清澤 哲朗

1 はじめに

長野県動物愛護センター「ハローアニマル」（以下、「ハローアニマル」という）では、開設当初から動物ふれあい事業の一環として「動物ふれあい教室」及び、遠隔地に出向いて行う「動物ふれあい出前教室」を実施している。その目的は、身近な動物について正しいふれあい方を学び、命の大切さや相手を思いやる気持ちを育むことである。

一方、現代社会では核家族化が進み、子どもたちが死に接する機会が減少しており、死が不可逆的なものであることを認識できない子どもたちが6割もいるという調査結果がある¹⁾。このような子どもたちは「命」を限りあるものと捉えることができず、犯罪や命の軽視につながることも危惧されている。

そこで、第1表のとおり、動物ふれあい出前教室を単に「動物にふれること」から「動物の命について考えること」に内容を充実させて実施した結果、児童らの動物に対するイメージに変化が生じ、思いやりや命を大切にする気持ちを育む一助となったことからその概要を報告する。

2 事業の概要

第1表 動物ふれあい（出前）教室とハローアニマル「いのちの授業」との比較

動物ふれあい （出前）教室	内容	守ってほしい「4つのおやくそく」について ・ゆっくり歩いてね ・やさしい声でお話してね ・やさしくさわってね ・手をあらってね	犬とのあいさつの仕方について	拡張心音計を用いて動物の心音を聞く	しらない犬に出会った時の対処法
	目的	動物を驚かせず、動物の気持ちになってふれあう方法を知る。		動物も生きてい ることを実感す る。	繋がれていない犬と出会ったとき、怖くても走って逃げないための練習をする。
ハローアニマル 「いのちの授業」	内容	動物の命をテーマに、児童らが主体的に考え、自らの考えを発表する授業を行う。			
	目的	「命を大切にする心」及び「相手を思いやる気持ち」を育む。			

(1) 事業の名称

ハローアニマル「いのちの授業」（以下、「授業」という）

(2) 事業の目的

動物の命について児童が主体的に考えることで、「命を大切にする心」及び「相手を思いやる気持ち」を育む。

(3) 実施施設

長野県内の小学4年生の1クラス（児童数34名）

(4) 実施方法

上記の施設に出張し実施した。授業は、ハローアニマル職員（以下、「職員」という）が一方的に話をするのではなく児童が主体的に考えられるよう、ワークショップ形式とした。第2表で示したとおり、1から順に児童に質問しながら授業を進め、動物（他者）のきもちを察することで思いやりの心を育みながら、「命に対する責任」を知りそれを果たすことで動物たちの命を大切にできると実感する構成とした。

また、授業では児童たちにあらかじめ作成したワークシートを配布した。そして、児童自身の考えをワークシートに書いてもらいそれを元に自分の意見を発言できるようにすることで、個々の児童が質問に対して主体的に考えられる効果を狙った。

(5) クラスの状況

このクラスは動物愛護に関心が高く、小屋でウサギを3羽飼養し、児童らは動物の遺棄や飼い主の飼育放棄による殺処分等についても自学していた。

第2表 「いのちの授業」の構成

	気付いてもらいたいこと	質問
1	私たち人間のまわりには、たくさんの動物たちがいる。	・みんなのまわりに動物はいますか？
2	私たち人間と同じで、その動物たちにも 感情や要求 がある。	・みんなはどのように暮らしたいかな？ ・動物たちはどのように暮らしたいだろう？
3	私たち人間は、その感情や要求を理解し、 適切に受け止める責任 がある	飼養していたウサギを話題にし、 ・ウサギがうれしいと思うのはどんな時だろう？ ・ウサギがかなしいと思うのはどんな時だろう？ 飼養している動物の生活の質や感情は飼い主の世話の仕方です左右される。
4	私たち人間は、動物だけでなく、 社会 に対しても 責任 がある。	学校に仔猫が捨てられたことを話題にし ・どうして飼い主は仔猫を捨てたのかな？ ・どうしていたら飼い主は仔猫を捨てずに済んだのかな？
目標	その 責任に気付く ことで、動物の命を大切に、他者を思いやる気持ちを育むことができる。	

3 結果

(1) 授業中の児童の様子

児童はワークシートに自分の意見や思いを意欲的に書き込み、発言も活発に行った。授業中、動物のイラストを見せ、「みんなはどのように暮らしたいか。またこのイラストの動物たちはどのように暮らしたいだろうか。」と職員が質問したのに対し、児童らは「私たちは『健康で長生きしたい』、『きれいで暖かい家で暮らしたい』、『おいしいものを食べたい』。」等と発言した。また、「イラストの動物たちは『飼い主と遊びたい』、『きれいなところに住みたい』、『寒いところはいやだ』。」等とイラストの動物のきもちを推測し発言をした。その結果、動物も人間と同様感情や要求があることに気付くことができた。

また、児童らが飼育しているウサギを話題にし「ウサギがうれしいのはどんなときか。逆に、かなしいのはどんなときか。」と職員が質問したところ「ウサギがうれしいのは『小屋をきれいにしてもらったとき』、『餌をたくさんもらえたとき』、『外で遊ばせてもらったとき』、ウサギがかなしいのは『無理矢理だっこされたとき』、『たくさん触られたとき』、『小屋が寒かったとき』。」と発言した。

その結果児童らは、飼っている動物がうれしかったりかなしかったりするのには人間の世話の仕方に左右されるのだということに気付くことができた。

(2) 授業後のアンケート調査

ア 自分が抱く動物に対するイメージの変化

授業を受ける前後のイメージを質問したところ、授業前は「かわいい、癒される」等といった感情的に快とするイメージを挙げる児童が 34 名中 18 名(52.9%)いた。逆に「怖い、敵」等といった不快なイメージを挙げる児童も 34 名中 4 名(11.8%)いた。また、「人間がいなくても自活できる生きもの」といった人間とは無関係に生きているイメージや人間とは違う存在だとする児童が 34 名中 6 名(17.6%)いた。それが授業後には、「人間と同じで感情や要求をもっている」「動物にも人間と同じ大切な命がある」等、人間と同様に命ある存在と回答した児童が 34 名中 16 名(47.1%)、「人間が責任をもって関わる存在」等の人間に責任の所在を感じた児童が 34 名中 11 名(32.4%)、「きもちを考えながら世話をしなければならない存在」等と人間が思いやりをもって接しなければならない存在だと回答する児童が 34 名中 2 名(5.9%)いた。

イ 今後、動物の命に対して実践していきたいこと

「心を込めて世話をすること」、「動物のきもちを考えること」等と動物を思いやりたい旨を回答した児童が 34 名中 18 名(52.9%)いた。また、「責任をもって最期まで飼うこと」等の命を大切にしたい旨を回答した児童は 34 名中 10 名 (29.4%) であった。

第 3-1 表 授業後のアンケート結果「自分が抱く動物に対するイメージの変化」

授業前		人数	割合(%)	授業後		人数	割合(%)
感覚的に快	・かわいい ・癒される 等	18名	52.9	・怖くなくなった ・癒し 等	3名	5.9	
感覚的に不快	・怖い ・敵 等	4名	11.8	——	0	0	
・自活している生き物 ・人間とは違う存在 等		6名	17.6	・「人間と同じ」「命」といった言葉で表現	16名	47.1	
				・「人間が責任をもって関わる存在」等と表現	11名	32.4	
				・「きもちを考えながら世話をしなければならない存在」等と表現	2名	5.9	
その他(無回答含む)		6名	17.6	その他	2名	5.9	

アンケート回答者数：34 名

第3-2表 授業後のアンケート結果「今後、動物の命に対して実践していきたいこと」

回答内容		人数	割合(%)
「動物への思いやり」に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・心を込めて世話すること ・動物のきもちを考えること ・優しく接すること 等 	18名	52.9
「命を大切にすること」に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・責任を持って最期まで飼うこと ・不幸な命を増やさないように手術を受けさせること ・動物を飼っている人に、授業で学んだ飼い主の責任について教えること 等 	10名	29.4
その他の回答		6名	17.6

アンケート回答者数：34名

4 考察

動物ふれあい（出前）教室における児童の感想は、「かわいい」、「温かい」、「触ると気持ちがいい」といった動物の外観や自分の感情が中心のものであり、本授業を受けた児童たちも、授業前には動物に対して同様のイメージを抱いていた。しかし、授業後には多くの児童で「人間が責任を持って関わっていかねばならない存在」、「人間と同じ命がある大切な存在」等とイメージが変化した。このことから、本授業を受けたことで動物が「命あるもの」であり、「その命を大切にしていかなければならない」という意識が生まれたものと思われた。

5 まとめ

担当教諭は「動物愛護教育については自分の知識だけでは指導に行き詰まりを感じており、いのちの授業は非常に有意義な時間であった。児童たちも、動物の命や相手への思いやりについて真剣に考える良い時間をもらえた。」と本授業に好意的であった。また、「保健所に勤務し、やむをえず犬や猫を殺処分した経験がある獣医師だからこそ命について語る言葉に重みがあり、本授業を行うことは意義がある。」との評価であった。

また、授業を受けた児童たちは終始意欲的な姿勢を見せ、主体的に考えることで動物に対するイメージが変化し、思いやりや命を大切にする気持ちを育む効果も期待できたことから、本授業はこれからのハローアニマルの事業として大変重要であると思われた。

長野県の将来を担う子どもたちが、動物を含めたすべての命を大切にし、他者を思いやることができる大人になるための一助となることを願い、更に本事業を充実させていきたい。

参考文献

- 1) 中村博志ら：バーチャルリアリティーと死の認識の関連性について(2002)